

「クリスマスの星」

主任司祭 晴佐久昌英

「あなたの手で造られた大空を仰ぎ、
月と星を眺めて思う。
人とは何者か、
なぜ人に心を留められるのか」

詩編 8(教会の祈り訳)より

澄んだ夜空にきらめく無数の星々ほど、人の心を揺さぶるものはない。太古の昔より、人々は星空を見上げて神を思い、永遠なる世界に思いをはせてきた。人間がいつから意識を持つようになったのかは定かではないが、その原初の意識の発生と、天空を巡る太陽や星々との間に深い関係があったことは、間違いない。意識を持ったから星を見上げたのか、星を見上げるうちに意識が芽生えたのか。いずれにせよ、この圧倒的な星空に育まれた「畏敬の念」が、人を人にしてきたのである。

イエスが生まれた時、ひとつの星が現れ、それを見た東方の占星術の学者たちはイエスを拝みにやってきた。澄み切った中近東の夜空にひときわ輝く星の出現は、さぞかし神秘的だったことであろう。畏敬の念を胸に、ひたすら星を見つめて救い主の元へ向かう旅は感動に満ちたものだったであろう。この学者たちをうらやましく思う。

今でこそ占星術などというと怪しげな分野と思われがちだが、星の運行に意味を見出し、人々に天からのメッセージを伝えるという意味では、実はどんな学問よりも尊いのではないか。二千年前のこの星にしても、現代の天文学は超新星だろうとか大彗星だったのではなどと説明するが、それは現代の学問がそう呼んでいるだけのことで、この星のメッセージを語るものではない。今、超新星を見て旅に出る天文学者がいるだろうか。

イエスは、天の国の秘密を語る時、イザヤの預言を引用して警告した。
「あなたたちは見るには見るが、決して認めない」

事実、すべての人を救う神の子の誕生を告げる星が現れ、実際にだれもがそれを見ていたのに、旅に出たのは占星術の学者たちだけだったのである。

現代の都市社会において星が見えなくなったことと、そこの住人が神を見失ったこととは無縁ではない。人は人となったそのときから星を見上げることで、神を知ってきたのだから。星は今も神の無限の力を輝かせ、神の無限の愛を語り続けている。つらい思いを抱えてうつむくすべての人に言いたい。魂の目で見上げれば、救い主の元へ導く救いの星は、今も輝いているよ、と。

クリスマスシーズンになると、街は無数の電球に覆われ、まばゆい不夜城と化す。それはそれできれいだが、「どこそこのクリスマスツリーに何万個の電球がともされた」などというニュースを聞くたびに、不思議な気持ちになる。それを消せば、全天にその何万倍もの星が輝いているのが見えるのに。